鳩摩羅什の神滅論(1)

河野　訓
（東京大学）

はじめに

今回の日本仏教学会は「仏教の霊魂観」という共同研究テーマを掲げているが、鳩摩羅什のいう神(しん)とは我と同じくアートマンの訳語として用いられる語である。

霊魂の滅不滅を論じた神滅神不滅の論争は六朝を通じて非常に活発に論じられた。四世紀、東晋時代に般若の空について種々の研究がなされ、各種の義が立てられたが、それを承けて大乗仏教における最高の空理解を中国仏教界に示したのが鳩摩羅什である。しかし、余りに仏教の正統な立場に立った鳩摩羅什の空思想は門下によって否定されるかたちになってしまい、中国には定着しなかった。本稿は霊魂の存在の否定につながる自我の否定、いうならば霊魂の否定の基礎にある非神論すなわち鳩摩羅什の神滅論を今一度、根拠とする文献を明らかにしながら検証してみようとするものである。

一　鳩摩羅什の思想研究にあたって

鳩摩羅什は中国仏教史を代表する大訳経家であることはいうまでもないが、その思想研究に使える文献としては、先ず廬山の慧遠との問答である『鳩摩羅什法師大義』（『大乗大義章』）が挙げられる。また、『注維摩詰経』所収の鳩摩羅什の注釈もある。その他の鳩摩羅什による翻訳経論も他の異訳経典、サンスクリット語・チベット語文献と比較対照し、諸訳間の異同や出入りに注目することによってその思想を考察することが可能である。(2) これとは別に『梁高僧伝』や僧叡らによる経序のなかにも鳩摩羅什の思想に関連する所があるから見逃すことのないようにしなければならない。鳩摩羅什の思想研究の材料となりうるのはこのような文献であろう。

二　鳩摩羅什の翻訳活動

鳩摩羅什は弘始三年（四〇一）十二月二十日に入関したことは諸文献で一致するところであり、確実である。翌弘始四年には翻訳活動が開始されている。(3) 鳩摩羅什の没年については塚本善隆博士が「鳩摩羅什法師誄」ではなく『梁高僧伝』に拠って説いた弘始十一年（四〇九）説が妥当であろうと考える。(4) この間、『出三蔵記集』によれば三十五部二百九十四巻を翻訳している。初期には『般若経』、『法華経』、『維摩経』の重訳が主になされ、その後、龍樹系の大乗論書を訳し、中観系の教説を中国仏教界に持ち込んでいる。翻訳の初期の経典類はすでに以前の訳経家によって漢訳されていたにもかかわらず、意味が不明瞭なためなどの理由で重訳したものである。

鳩摩羅什の入関以前、中国に於いては『般若経』研究に基づき、種々の空理解が示されていたことは周知のとおり

で、鳩摩羅什門下の僧肇撰述の『肇論』不真空論では心無義・即色義・本無義を挙げて論破している。

鳩摩羅什に対する評価のうち、とりわけその翻訳活動の意義を明らかにしているのはやはり門下である僧叡撰述の『毘摩羅詰提経義疏序』である。(5)「此の土、先に出せし諸経、識神性空に於いて明かに言う處少なく、存神の文は其の處甚だ多し。中百二論の文は未だ此に及ばず」とある。鳩摩羅什以前の魏晋仏教界は、流行の老荘学に寄託して『般若経』や『維摩経』に説かれる大乗の空思想を理解しようとした、いわゆる格義仏教の全盛時代であり、種々の経典が訳されたにもかかわらず、識神の性空を明言するものは少なく、神が存するとする経文が甚だ多かった。中論、百論の二論はまだこの地に及んでいない。広く通じている師もなく、誰も正すことはできない、という。鳩摩羅什によってはじめて中観の空思想の真意が正しく伝えられ、無我の義が大変明らかになったことがここには示されている。(6)翻訳の経文ではなくとも、郗超の奉法要に「神無常宅、遷化靡停、謂之非身」（大五二、八八中二三）とあるものなども存神の説のあらわれにほかならない。(7)

論書については、中観思想を代表する三論のうち、『中論』・『百論』の二論までも重訳再治の試みがなされているが、それはこれらの論が、中国仏教には全く未知のものであり、しかも、龍樹系中観仏教を代表する、高度な哲学的内容をもった論書であったからと見られている。(8)

鳩摩羅什の翻訳方針について留意しておきたいことは、鳩摩羅什が中国に必要と思ったものを訳したとされる点である。僧叡の「大智釈論序」及び出論後記である『大智論記』によれば、今日現存する鳩摩羅什訳『大智度論』百巻は羅什の判断によって原本の三分の一に圧縮されたもので、般若経の第二品以下については要点のみを取り出したものとされている。(9)このように論序、論記では『大智度論』は全巻訳されていない、と云われている。また、従来の研

究により明らかなように、『大智度論』には明らかに羅什のものと思われる言葉や説明が挿入されており、全文を龍樹の著作と見なすことはできないとされている。[10] また、『百論』についても僧肇の「百論序」によれば、本来二十巻あったうち、前半十巻のみが訳されただけで、後半十巻は漢訳されていないという。[11]

三　鳩摩羅什の「神」についての見解

鳩摩羅什はいわゆる霊魂にあたるものを取り上げてそれを否定したのではなく、アートマンとしての神・我を否定し、常住を否定している。

①『注維摩詰経』

僧肇撰『注維摩詰経』に残される鳩摩羅什の注において、「神」がどのように用いられているかをみてみると、神通、神足、神力、神変、威神、或いは鬼神、天伎神、悪神などの何々神として用いられる「神」、更に神徳奇絶、神奇というこの上なくすぐれているという意味で用いられる「神」以外に、身の常主という意味で「神」を用いている例がある。

什曰、須彌地之精也。此地大也。下説水火風地其四大也。惑者謂四大有神、亦云最大、亦云有常。今制以道力明不神也。内之纎芥明不大也。巨細相容物無定體、明不常也。此皆反其所封拔其幽滯。以去其常習、令歸宗有塗焉。[12]

惑う者は四大に神有りと謂う。亦た最大なりと云う。亦た有、常なりと云う。今、制するに道力を以て神ならざるを明かすなり、という。

「神」という語は使われないが、身の常主がないという主張は方便品第二の鳩摩羅什注（大三八、三四一中～三四二

上）にも見ることができる。『維摩経』では身の無常なることを聚沫、泡、炎（かげろう）、芭蕉、幻、夢、影、響、雲、雷にたとえ、それぞれの理由を加えたあとで、身を地水火風の四大それぞれに分けてその空・無我をたとえている。そのなかの経文「是身無主。爲如地」（是の身は主無し。地の如きたり。）に対する什の注は次のとおりである。

地無常主、强者得之。身亦無主。隨事而變、病至則惱、死至則滅。聚散隨緣不得自在也。(13)

地には常主無く、強者之を得。身も亦た主無し。事に随いて変じ、病至れば則ち悩み、死至れば則ち滅す。聚散は縁に随いて自在を得ず、という。地に常主がないように身にも主というものはないという。僧肇も羅什の注を承けて

身亦然耳。衆緣所成。緣合則起、緣散則離。何有眞宰常主之者。(14)

と注している。身も亦た然るのみ。衆縁の成す所なり。縁合ずれば起こり、縁散ずれば離る。何ぞ真宰の常主の者有らん。このように身には真宰常主はないという。真宰とは実体的主体で、存在及びそのはたらきの主宰となるものを意味する。

鳩摩羅什、僧肇のこのような考えは廬山の慧遠の考えとは全く異なっている。『高僧伝』巻六所収の、慧遠が劉遺民に記させた東晋元興元年（四〇二）の般若台精舎阿弥陀像の前での発願文（白蓮社の記）の中でこう述べられる。

蓋神者、可以感涉、而不可以迹求。必感之有物、則幽路咫尺。苟求之無主、則渺茫何津。(15)

蓋し神なるものは、感を以て渉るべし、迹を以て求むべからず。必ず之を感ずるに物有れば、則ち幽路も咫尺（ちか）きものなり。苟も之を求むるに主無ければ、則ち渺茫として何の津（てだて）あらん、という。(16)「神」にはすがたなく探しようもない。物を感じる能力がありさえすれば、その存在を証明できる。精神の主宰者がいなければ、人は西方浄土の神界に至りえない、という。追求すべき彼岸の世界に対して、それを追求する主体としての「神」を認めている。

慧遠は「沙門不敬王者論」でも次のようにいう。

推此而論、則知化以情感神以化傳。情爲化之母。神爲情之根。情有會物之道。神有冥移之功。但悟徹者反本。惑理者逐物耳。[17]

此を推して論ずれば、則ち化（万物の生滅変化〔輪廻〕）は情を以って感じ、神（精神〔霊魂〕）は化を以って伝わると知るなり。情は化の母なり。神は情の根なり。情は物に会わるの道有り。神は冥移（冥冥の中に転移していく）の功（功用）有り。但だ悟徹（大悟徹底）せる者は本に反り（根源に反って精神〔霊魂〕の不滅を知）るが、理（道理）に惑える者は物を逐うのみ（物の世界の変化だけを逐いまわして精神〔霊魂〕の不滅をさとらない）。

慧遠と対照すれば明かであるが、鳩摩羅什は身の常主である「神」を認めていない。[18]

②『鳩摩羅什法師大義』（『大乗大義章』）

『鳩摩羅什法師大義』の主題の一つに法身の問題がある。[19] 鳩摩羅什と慧遠の間には法身についての理解に違いがあったようで、法身についての鳩摩羅什の慧遠に対する答での中で、鳩摩羅什は次のように述べている。

天竺但言歌耶、秦言或名爲身、或名爲衆、或名爲部、或名法之體相、或以心心數法名爲身。…衆事和合、不相離故、得名爲身。…此中眞法身者、實法體相也。[20]

鳩摩羅什は、天竺で「歌耶」というのを秦言では身ともいい、衆とも、部とも、法の体相などともいうという。慧遠は「身」の天竺語としての意味がわからず、中国語「身」という語意からこれを身体と理解した。慧遠はすべての仏法を獲得した「神」を「法身」と考えたのである。したがって、慧遠自身の宗教世界観には不変不滅の「神」があり、

このために鳩摩羅什の説く大乗中観の性空の真実の意味を理解できなかった、という指摘もなされている。[21]

以上、鳩摩羅什の「神」についての見解を述べたが、鳩摩羅什は霊魂にあたるものをことさらに取り上げて否定したのではなく、常主というものはないという。霊魂の否定以前にアートマンとしての神・魂をすべてのものについて否定するのである。

四　鳩摩羅什の思想の裏付けとなる諸論

①『百論』における破神

前述のとおり、『百論』は鳩摩羅什自身の手によって重訳されている。僧肇の「百論序」によれば、鳩摩羅什が『百論』を常に味詠して心要としていたおり、初めに自ら訳してみたが漢語もよくせず、流暢な訳ではなかった。そこで弘始六年（四〇四）、安城侯姚嵩が学僧を集めて羅什と再校訂して正本としたという。[22] その内容についても本来二十品であったのが、鳩摩羅什がこの地即ち中国に益なしという理由で翻訳しなかったために後半部分を欠いて伝わっていないという事情については前述のとおりである。[23] したがって鳩摩羅什の伝えた『百論』前半の十品は鳩摩羅什にとっても中国人にとっても非常に重要と認識されていた論書であることが了解できる。

百論の破神品第二では初めに迦毘羅（Kapila）は言うとして数論派の絶対我の説を挙げ、[24] 優楼迦（Ulūka）は言うとして勝論派の個人我の説を挙げたうえで、[25] 続いて次のように述べて「神が実有である」という両者の説を否定し、「神が無常である」ことを主張している。[26]

諦観察之實無有神。

覺若神相、神無常（修妬路）。若覺是神相者、覺無常故神應無常。[27]
覺是無常、汝說神常。神應與覺異。若神覺不異者、覺無常故、神亦應無常。[28]

②『中論』における神否定

『中論』においてもアートマンである神（我ともいう）が否定される。

観本住品第九では本住（svavasthita）すなわちもとから存在する安定した原理というものをまず否定する。

如是種種推求、離眼耳等根苦樂等法、先無本住。若必謂離眼耳等根苦樂等法有本住者、無有是事。[29]

すなわち、かくの如く種種に推求するに、眼耳等の根、苦楽等の法を離れて、先に本住なし。若し必ず眼耳等の根、苦楽等の法を離れて本住ありと謂わば、是の事あることなし。

眼耳等の根、苦楽等の法が属しておこるところのもの即ち本住はない、という。さらに、アートマンである神を否定する。

眼耳等諸根　苦樂等諸法　所從生諸大　彼大亦無神。[30]

眼耳等の諸根、苦楽等の諸法の、従りて生ずる所の諸大、彼の大にも亦た神なし、という。さらに色受想行識の五陰が神である、或いは五陰以外に神というのもが別に存在するという主張についてこのようにいう。

有人說、神應有二種。若五陰卽是神。若離五陰有神。

若五陰是神者、神則生滅相。如偈中說。若神是五陰卽是生滅相。何以故。生已壞敗故。以生滅相故、五陰是無常。如五陰無常、生滅二法亦是無常。何以故。生滅亦生已壞敗故無常。神若是五陰、五陰無常故、神亦應無常生滅相。

但是事不然。

若離五陰有神、神卽無五陰相。如偈中說。若神異五陰則非五陰相。而離五陰更無有法。若離五陰有法者、以何相何法而有。若謂神如虛空離五陰而有者、是亦不然。何以故。破六種品中已破虛空。無有法名爲虛空。(31)

すなわち、人あって説く、『神に二種あるべし。若しくは五陰即ち是れ神。若しくは五陰を離れて神あり』と。

先ず、五陰が神であるという説について、若し五陰が是れ神ならば、神は則ち生滅の相ならん。偈中に説くが如し。『若し神是れ五陰ならば、即ち是れ生滅の相なり』と。何を以ての故に。生じ已って壞敗するが故なり。生滅相を以ての故に、五陰は是れ無常なり。五陰の無常なるが如く、生滅の二法も亦是れ無常なり。何を以っての故に。生滅も亦た生じ已って壞敗するが故に無常なり。神が若し是れ五陰ならば、五陰も無常なるが故に、神も亦た応に無常生滅相なるべし。但だ是のこと然らず。

つまり、五陰が神、又は神が五陰であるとするなら、五陰が生滅の相であり、無常であるから、神も生滅相であり、無常であるとする。

また、五陰を離れて神がある、という説について、若し五陰を離れて神あらば、神は即ち五陰の相なし。偈中に説くが如し。『若し神、五陰に異ならば、則ち五陰の相に非ず』と。しかも五陰を離れて更に法あることなし。若し五陰を離れて法あらば、何の相、何の法を以て有りや。若し神は虛空の如く五陰を離れて有りと謂はば、是れ亦た然らず。何を以っての故に。破六種品中に已に虛空を破したり。法の名づけて虛空と為すもの有ることなし。

神と五陰が違うものであるという場合、五陰以外に存在するものはないから、それはおかしいという。

小　結

慧遠の神不滅論に対して、鳩摩羅什は本住を否定し、アートマンである神＝我を否定し、更に存在するものやそのはたらきの主宰となる常主を否定する。しかし、このように鳩摩羅什が大乗空思想に拠り、それ以前の道安らが理解に苦しんでいた般若に対する理論を鮮明にし、空、無我を明らかにしたものの、ひとつには慧遠らによる神不滅論、ひとつには鳩摩羅什の晩年である義熙十三年（四〇八）十月から翌十四年一月にかけて法顕と仏駄跋陀羅によって進められた『大般泥洹経』六巻の漢訳以降、鳩摩羅什の神を否定する考えは中国仏教界においては主流とはみなされなくなってしまったのである。

注

（1）学会の発表題「鳩摩羅什の非神思想」を改題。

（2）戸田宏文「維摩経に顕れた鳩摩羅什三蔵の思想」（『金倉博士古稀記念印度学仏教学論集』平楽寺書店、一九六六年）。中村元「クマーラジーヴァ（羅什）の思想的特徴―『維摩経』漢訳のしかたを通じて―」（同）。

（3）鳩摩羅什の翻訳活動については塚本善隆「鳩摩羅什論（1）」（『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』大蔵出版、一九六四年）及び同「鳩摩羅什論（2）」（『干潟博士古稀記念論文集』干潟博士古稀記念会、一九六四年）に詳しい。また、鎌田茂雄『中国仏教史』巻二（東京大学出版会、一九八三年）二二五頁参照。

（4）塚本善隆「仏教史上における肇論の意義」（『肇論研究』法蔵館、昭和三〇年）。鎌田茂雄前掲書二二一頁参照。

（5）『出三蔵記集』巻八。僧叡「毘摩羅詰提経義疏序」「自慧風東扇法言流詠已來、雖曰講肆格義迂而乖本、六家偏而不卽。性空之宗、以今驗之、最得其實。然鑪冶之功微恨不盡。當是無法可尋、非尋之不得也。何以知之。此土、先出諸經、於

識神性空明言處少、存神之文其處甚多。中百二論文未及此。又、無通鑒、誰與正之。先匠所以輟章遐慨、思決言於彌勒者、良在此也」（大五五、五九上一～八）。

（6）平井俊栄『中国般若思想史研究』（春秋社、一九七六年）八四～八五頁。

（7）湯用彤『漢魏両晋南北朝仏教史』上冊（台湾商務印書館誌、一九六一年）二三〇～二三一頁。

（8）平井俊栄前掲書九〇頁。鎌田茂雄前掲書二一〇頁参照。

（9）『出三蔵記集』巻十。僧叡「大智釈論序」「論之略本有十萬偈。偈有三十二字、幷三百二十萬言。胡夏既乖、又有煩簡之異。三分除二得此百卷」（大五五、七五上一五～一七）。出論後記「論初品三十四卷、解釋一品、是全論其本。二品已下法師略之取其要、足以開釋文意而已、不復備其廣釋、得此百卷。若盡出之、將十倍於此」（大五五、七五中一五～一八）。

（10）原著者が龍樹であるか否かには従来より疑義が呈されているが、いずれにしても訳者鳩摩羅什の言と思われるものが入り込んでいることは干潟龍祥「大智度論の作者について」（『印度学仏教学研究』七巻一号、一九五八年）で指摘されている。

（11）『出三蔵記集』巻十一。僧肇「百論序」「論凡二十品。品各五十偈。後十品、其人以爲無益此土。故闕而不傳」（大五五、七七下七～九）。

（12）『注維摩詰経』巻第六（大三八、三八二中二一～二七）

（13）『注維摩詰経』巻第二（大三八、三四一中二七～二九）。鳩摩羅什は「鳩摩羅什法師大義」でも同様の趣旨で「因縁故名爲人。因縁散自然而息」巻上（大四五、一二四中五～六）という。

（14）『注維摩詰経』巻第二（大三八、三四一下五～七）

（15）『高僧伝』巻第六（大五〇、三五九上二～四）。但し、大正蔵本文では渺＝眇、何＝河であるが脚注により元本、明本の渺、何をとった。

（16）この読みは『定本中国仏教史Ⅱ』（柏書房、一九九四年）六五六頁に拠った。

（17）『弘明集』巻第五「沙門不敬王者論」（大五二、三一下一一～一四）。大正蔵は物＝初。三本、宮本に従う。慧遠の神不滅論については同論形盡神不滅第五に詳しく、研究論文も多いのでここではこれ以上取り上げない。

（18）ここで取り上げた以外に『注維摩詰経』菩薩品第四では什曰のあとに、問曰…答曰、とある文中に「諧神」とある（大三八、三三六下八）。意味は「諧心」と同じであり、こころを和らげるという意味であろう。この「神」は人にそなわるこころであって、生きている人のうちにある魂（生命魂）や死後の魂を意味しているのではない。

（19）横超慧日「大乗大義章における法身説」（『大谷大学研究年報』第十七集、一九六五年。『中国仏教の研究』第二（法蔵館、一九七一年）所収）参照。

（20）『鳩摩羅什法師大義』巻上（大四五、一二六下七～一四）

（21）任継愈『中国仏教史』巻二（中国社会科学出版社、一九八五年）六八二～六八三頁。

（22）『出三蔵記集』巻十一。僧肇「百論序」「有天竺沙門鳩摩羅什。…常味詠斯論、以爲心要。先雖親譯、而方言未融、致令思尋者躊躇於謬文、標位者乖迕於歸致。大秦司隸挍尉安城侯姚嵩、…每撫茲文所慨良多。以弘始六年歳次壽星、集理味沙門與什考挍正本。陶練覆疏、務存論旨。使質而不野、簡而必詣。宗致劃爾、無間然矣」（大五五、七七中二七～下七）。

（23）注10参照。

（24）『百論』巻上「神爲主常、覺相處中、常住不壞不敗攝受諸法」（大三〇、一七〇下一六～一七）。

（25）『百論』巻上「實有神、常。以出入息、視、眴、壽命等相故則知有神。復次以欲、恚、苦、樂、智慧等所依處故則知有神」（大三〇、一七〇下一八～二一）。

（26）『百論』巻上（大三〇、一七〇下二四～二五）。

（27）『百論』巻上（大三〇、一七〇下二七～二八）。

（28）『百論』巻上（大三〇、一七一上四～五）。

（29）『中論』巻第二（大三〇、一三下一三～一五）。

（30）『中論』巻第二（大三〇、一四上二六～二七）。

（31）『中論』巻第三（大三〇、二四上一五～二七）。

その他の参考文献

塚本善隆編『肇論研究』（法蔵館　一九五四年）
木村英一編『慧遠研究　―遺文篇』（創文社　一九六〇年）
牧田諦亮編『弘明集研究』巻中（京都大学人文科学研究所　一九七四年）
同　　巻下（京都大学人文科学研究所　一九七五年）
吉川忠夫『弘明集・広弘明集』（中央公論社『大乗仏典』〈中国・日本篇〉4　一九八八年）
中嶋隆蔵『出三蔵記集序巻訳注』（平楽寺書店　一九九七年）
大正大学綜合仏教研究所注維摩詰経研究会『対訳　注維摩詰経』（山喜房仏書林　二〇〇〇年）
鄭基良『魏晉南北朝形盡神滅或形盡神不滅的思想論證』（文史哲出版社　二〇〇二年）
劉立夫『弘明與明教　《弘明集》研究』（中国社会科学出版社　二〇〇四年）